



2017. 10. 1

10月ようちえんだより

西神戸 YMCA 幼稚園

皆さんよくご存知の「ドレミの歌」、これは映画「サウンド・オブ・ミュージック」でジュリー・アンドリュース演じる家庭教師のマリアがその派遣先であるクリストファー・プラマー演じるオーストリアの大佐トランプ家の7人の子どもたちと一緒に歌って躍る場面で紹介されました。この映画は1965年の作品ですので、「ドレミの歌」ももう50年以上歌い継がれているということになります。このミュージカル映画で作品中使われている音楽や歌はとても印象深いものばかりです。中学生になって初めてこの映画を見てすぐにファンになり、映画のサントラ盤をレコード屋で買い求めたものです。その曲中でも個人的には「I have confidence (私は自信がある)」という曲が特に印象に残っています。マリアはシスター見習いながらとてもお転婆娘でいつも叱られてばかりですが、シスターたちからは娘のように可愛がられています。そんな時、しっかりしたシスターとなるために修道院長に家庭教師の派遣を命じられます。そして派遣先に向かうまでの道中、初めて会う大佐や子どもたちのことを考えて不安になって立ち止まってしまう。その時に自分自身に言い聞かせるように『わたしは大丈夫よ、わたしは自分を信じているの』と歌います。なんとなく心が伝わってきて思わず「がんばれ〜」と心の中で応援していました。思春期真っ只中だったので自信を持つことはとてもとても大切なことなんだと実感したことを今でも覚えています。

最近、「根拠の無い自信」について私が思っているのとは異なる意味合いで使われることがあります。私自身が思う意味は「何故だかはわからないけれど、湧き上がってくる自分への信頼感、頼もしい感じ」とでも言いましょうか、幼少期に親から受けた無条件の愛により子どもに備わる自信のように感じます。そのような環境で育った子どもは何をやってもそれを受け入れられる、わたしは必要な存在、大切な存在なんだという価値観を育むことができます。このような価値観を持てば、より肯定的に経験を積み上げていけますし、失敗を受け入れることも容易になるというわけです。だから「根拠の無い自信は」成長していく中でとても必要なものなのです。ただし、「甘やかし」と「無条件の愛」とは異なるものです。そこを履き違えるとその子どもは「わがまま」な存在となってしまいます。

先日の幼稚園の運動会では園児たちは様々な表情を見せてくれました。年少さんはそれぞれマイペースな子から活発な子まで子どもらしく体を動かすことを楽しみ自分を表現してくれました。年中さんはお友だちと協力することにも喜びを感じ、親子ダンスでもよろこんで体を動かす楽しさを表現してくれました。そして年長さんは体を動かす楽しさに加え、最後まであきらめない気持ちや、なにかをやり遂げる喜びをリレーやパラバルーンで表現してくれました。パラバルーンの演技を終えた後の自信にあふれた表情は『ドキッ』とするほど強い気持ちがあふれ、それぞれたくましく成長していることを感じた次第です。一つひとつの経験を通して『自信』をつけていく子どもたち、その過程を垣間見たようなひと時でした。

年主題 『愛されて育つ』

<年主題聖句> 「あなたがたは神に愛されている子供です。」

(エフェソの信徒への手紙5章1節)

10月主題 『ふれあう』

<聖句> 「アブラハムは、主の言葉に従って旅立った。」

(創世記12章4節)